

漢字学習力を上げるための支援

—「デジタル時代の漢字力と漢字教育を考える」(2024.Douglas)の研修を受けた実践— 篠塚Bower貴世美(シドニー日本人国際学校)

シドニー日本人国際学校は、日本人学級と国際学級を併設する私立校である。国際学級では主要教科をオーストラリアの指導要領に基づいて英語で学ぶ一方、毎日一時限の日本語授業を行っている。これらの学習者の背景は、日本語を第一言語とする児童から、継承語・外国語として学ぶ児童まで多様である。このように異なった日本語力の背景を持つ児童に、オーストラリアでの生活環境の中で日常、目にする機会の少ない漢字を実用的に使ってみようとする姿勢を育てることは至難の業である。

本実践報告はこれまで取り組んできた漢字学習力を伸ばすための日本語の授業の中での指導方法や支援方法と、2024年に行われたDouglas昌子氏による「デジタル時代の漢字力と漢字教育を考える」ワークショップの示唆を授業に反映したものである。本校の小学2年生から6年生までの国際学級で、漢字学習の入門期から基礎充実期の学習者を対象に実践した指導方法とその効果を報告する。

自主的に漢字を学び使おうとする漢字学習力を高めることを目標とし、これまで様々な指導方法や評価方法を工夫してきた。具体的な指導方法としては、学習をしているテーマの中で使用頻度の高い語彙を教師が提示し、それらの語彙に繋がる漢字を学習するという学習の流れを用いた。新出の漢字を一文字として教えるのではなく語彙として扱い、さらに、その漢字が異なった語彙の中でも使われていることを検索したりする学習活動から、更なる語彙量の拡充を図ろうと試みた。また、視覚連想法や音声連想法を取り入れて学習者自身が発見し確かめられる帰納的な自主学習力の育成に視点を置いている。漢字の形成や部首などの内部構造にも目を向けるための学習活動をほどこしたり、コロケーションの活用にも重点を置いた学習経路を提示した。このような具体的な手掛かりを基に漢字学習の発達段階の入門期から基礎充実期の学習者に応じた教材や学習経路の設計を試みってきた。

学習の評価は、語彙導入前後の選べる漢字力を簡易アセスメントや授業観察の記録から行った。その結果、児童の語彙使用頻度が増えたり熟語のコロケーションの使用が改善された。また、教室内で紹介をしている自己学習ツールを活用して自主的に漢字を検索し使用する意欲が高まった。特に視覚的連想は、記憶定着と書字への動機づけに効果的であった。

本実践の今後の課題として、一人一人の児童の日本語力の違いや学習方法の違いに合わせたDifferentiationを取り入れる事は、やはり教師側の授業準備の負担につながる事が挙げられる。また、個々の生徒の興味や意欲を高める事にはつながっているが、日本での国語の学習のように、全ての生徒が学ぶ必要があるとされる漢字数を網羅しているとは言えない。

しかし、このような授業実践を通して、従来の国語教育の中での正確に書けるための反復ドリル学習と漢字テスト中心の評価とは異なった、デジタル時代に即した多面的に漢字力を評価する取り組みによって、児童の漢字学習への意欲を高める指導へと繋げることができると考えられる。

参考文献

- Douglas 昌子(2024)「デジタル時代の漢字力と漢字教育を考える」実践ワークショップ
Douglas 昌子(2024)「漢字語彙教材・テスト作成のための補足情報」実践ワークショップ
Douglas 昌子(2021)「国語教育でもない外国語としての日本語教育でもない継承日本語教育とは」実践ワークショップ